

その一つの例が、まちづくりの方針として委員会から出されたスーパーと個人商店が複合した、「楽しく買い物ができるまち」である。スーパーの店と言っても容易なことではない。しかし、委員会のまちづくり方針に基づき、岩沼市は、県内の事業者を訪問し粘り強く交渉した結果、出店に漕ぎ着けたのだ。今では、市内・外から買い物客が訪れるようになり、憩いの場所として賑わっている。

このような地域と行政の信頼関係が、地域コミュニティの強化につながっていくこととなった。

玉浦西地区まちづくり検討委員会の委員を務め、現在は玉浦西まちづくり住民協議会で会長を務める中川勝義さんは「集落の仲間と



玉浦西地区まちづくり検討委員会△



整備された玉浦西地区▽



▲玉浦西まちづくり住民協議会
中川勝義会長 斎藤洋子さん

は別れたくないという気持ちがあるにあって。仮設住宅での生活は、高齢者にとっては辛いもの。もう元には戻れないのだから、前に進もうという前向きな姿勢を行政が理解してくれたのだと思います

地域コミュニティを

す。」と、話してくれた。

検討委員会に女性代表として参加していた斎藤洋子さんは「最初は、自分のことだけで精いっぱいでした。地域でまとまって移転できると決まったことが移転が早く進んだ理由じゃないでしょうか。

振り返っても仕方がないと思っています。今では、娘も結婚し、孫の顔も見ることができた時に、生きていて本当に良かったと思いました。」と笑顔で話してくれた。

現在、移転先となった玉浦西地区には、住宅敷地158区画、公営住宅178戸が造成されたきれいな街並みが広がっている。

避難所生活で生まれた 地域コミュニティ

津波の被害を受けた沿岸部の6つの集落の住民は、小・中学校などでの避難所生活を余儀なくされた。

そして、震災から4日が経った3月15日、市中央部の市民会館や総合体育館に集落ごとに移転したことにより、避難した皆さんは、集落ごとに集まって生活するようになっていった。見知った顔が近くにいることで安心感が生まれ、避難所でのルールも作られていった。



▲避難所での生活の様子
(写真提供：岩沼市)

皆で話し合い、皆で励まし合って生まれた地域コミュニティが集団移転の成功につながっていった。

仮設住宅でコミュニティ

岩沼市は、避難所で集落ごとに集団で生活したときのように、384戸にも及んだ仮設住宅への移転もまた、元の集落ごとに入居できるよう配慮した。

見知った顔の人々と同じ仮設住宅に入れることの心強さが地域コミュニティとして育まれ、人々が共に助け合って復興に向かっていくための大きなエネルギーになったのではないだろうか。

『減災』という考え方

防災から減災へ

震災によって、岩沼市の沿岸部は壊滅的な被害を受けた。その大半は津波によるものであった。そして、自然災害が人の力では完全には防ぐことができないことをまざまざと見せつけられた岩沼市には、その自然災害と共存していくために、被害をいかに最小限に食い止めるのかという「減災」の考え方が生まれた。

災害に備えるという「防災」の考え方と、防ぎきることができなくても、少しでも被害を最小限に留めようとする考え方、それが「減災」という考え方である。

千年希望の丘

津波による被害を、海沿いの公園にある築山の上で免れた人たちがいた。岩沼市はこの築山を太平洋沿岸に、「丘」として15基設置し、一時避難場所とすることを決めた。「丘」の土台には震災時のがれきや廃棄物の再生資材が用いられた。「丘」と「丘」を結ぶように連結して植栽されている樹木は、津波の威力を減衰・分散させるためのもので、すべての苗木は支援によって、植樹はボランティアの手によって植えられている。

平成25年6月に3万本の苗木が植えられてから、平成28年5月に植え

られた10万本までその数は25万本にもなった。「緑の防潮堤」である。

岩沼市は、人々の想いが人々を守り、千年先まで子どもたちが笑顔で暮らせるまちを目指して、この一帯をメモリアルパークとして整備することを決め「千年希望の丘」と名付けた。そして「千年希望の丘」は復興の象徴となった。

植栽された樹木が成長するまでに先は長い。緑の防潮堤も含めた「千年希望の丘」の完成までには、あと数年を要するとされている。

復興の主役は市民

常に「復興のトップランナー」として走り続け、各方面で注目を集めている岩沼市。それは、玉浦西地区への集団移転が住民とのスムーズな合意形成のもとで行われたことなど、

地域コミュニティを重視したまちづくりがあったからこそのものである。

そのことを菅井課長に聞くと「復興のトップランナーと言われるかもしれませんが、行政と地域が一体となった取り組みがあり、そして、多くの皆さんの支援があったからこそ今の岩沼市があると考えています。しかし、復興計画は、道半ばです。震災で亡くなった181人の皆さんが『もう一度生まれ変わるなら岩沼市に』と想っていたただけるような岩沼市にしていきたいと思っています。岩沼市は今後も『千年先まで子どもたちの笑顔が見られるようなまちづくり』を目指していきます。しかし、復興の主役はあくまでも市民の皆さんですよ。」と笑顔で答えてくれた。



▲ボランティアによる植樹の様子
(写真提供：岩沼市)



▲岩沼市復興創生課
菅井秀一課長